

小学校高学年児童における仲間関係の位相と心の居場所感

中山 満子（奈良女子大学研究院人文科学系）

1. はじめに

1980年代後半から青少年の居場所づくりの重要性が言われるようになり、多くの実践や研究が行われてきた。心理学においても青少年の「居場所」研究が数多く行われてきている。居場所という日常用語を心理学の俎上にのせるため、居場所は研究ごとに様々な操作的定義がなされてきた。例えば、居場所を、空間（安心できる場所）、時間（安心できる時間）、人間（安心できる人）という3つの要素からとらえ、その中の人間関係に焦点づけ、「居場所＝安心できる人」と定義している研究もある（例：岡村・豊田, 2015; 2016）。また杉本・庄司（2006）では、それまでの先行研究を整理・検討したうえで「いつも生活している中で、特にいたいと感じる場所」、つまり子どもが、客観的事実として「いる」場所、主観的な意味で「いたい」場所と定義している。この定義では、居場所として物理的な場所を想定していると言える。一方、西中（2014）は、居場所がないと感じる状況に陥ったときにそれを補うことができる場所と捉えて、「心の居場所」を定義している。つまり「例えばつらくなったとき、友だちとけんかをしたとき、悪口を言われたとき、悲しくなったときに一番行きたいと思う場」を想起させる方法で「心の居場所感」を測定している。西中によれば、「居場所づくり」の実践においては「居場所感の促進」という目的を明確化し、発達段階を考慮した実践を行う必要がある（p.467）。そのためにも、「居場所感」（＝居場所にいるときの感情や感覚）を測定する必要がある。本研究では、西中の定義に従い、小学校高学年児童の心の居場所感について検討することとする。

西中は、心の居場所感について被受容感、充実感、自己存在感、安心感の4因子を抽出している。さらに、4年生、5年生、6年生という学年段階と性別による差を検討している。その結果、被受容感と安心感は男子より女子で高く、被受容感、充実感、自己存在感は、4年生が5、6年生よりも高いという結果が得られている。西中は、この結果について仲間関係の位相（保村・岡村, 1992）からの考察を試みている。

仲間関係の位相とは、小学生から高校生くらいまでの間に、ギャング、チャム、ピアと仲間関係が発達していくという考え方である。保坂・岡村（1992）によれば、ギャンググループとは外面的な同行動からくる凝集性を特徴とし、児童期後半に親から離れて同性同輩で形成する関係である。チャムグループとは、内面的な類似性の確認による凝集性を特徴とし、中学生くらいの青年期前期に見られる関係である。興味や趣味の共通性を言葉で確認しあう関係といわれる。ピアグループとは、内面的にも外面的にも自立した個人として尊重しあい、異質性を認めることが可能な仲間関係であり、概ね高校生頃にチャムとしての関係に加えて形成されると言われる。

西中は、思春期にさしかかる小学校高学年児童の心の居場所感が、仲間関係のあり方と関連するのではないか、特に相対的に早熟な女子が小学生であってもチャムグループを形成している可能性に言及し、このことが居場所感の中の被受容感と安心感が男子よりも女子で高いことにつながっているのではないかと述べている。しかし、西中は仲間関係の位相については調査しておらず、居場所感と仲間関係については推測の域を出ない。そこで本研究では、小学校5、6年生を

対象に、居場所感と仲間関係について調査し、その発達について検討することを目的とする。

仲間関係の位相については、中島・関山（2016）が、上述のギャング、チャム、ピアそれぞれの特徴を表す項目からなる仲間関係位相尺度を作成して検討している。中島・関山は中学生を対象に調査をしており、発達との関係については特に検討されていない。そこで、本研究では、仲間関係位相尺度を用いて小学校5年生と6年生の仲間関係の位相について調べ、西中が示唆するように、心の居場所感と仲間関係の位相が関連するかどうかを検討することとする。ただし、仲間関係位相尺度で測定できるのは、ギャング、チャム、ピアそれぞれについて個人の持つ傾向である。また小学生から中学生にかけての段階では、位相のどこかに位置するというよりは、それぞれの特徴をあわせもった仲間関係を築いていると考えるほうが自然であろう。さらにその特徴の持ち方には個人差、発達差があるだろう。従って本研究では、仲間関係の位相を「特性」もしくは「傾向」の程度にとらえて、個人がそれぞれの傾向をどの程度もちあわせているかという観点から分析することとする。

2. 方法

2-1. 調査対象者と実施手続き

平成29年2月中旬に関西圏の中核都市にあるA小学校の5年生、6年生を対象に調査を実施した。生徒は選抜を経て入学しており、また一定数は中学受験を経験する。

調査はクラス担任によって実施された。質問紙の表紙に、回答に正誤はないこと、成績などには関係ないこと、途中で回答をやめたくならいつでもやめてよいことを明記したうえで行った。

調査の結果、5年生67名（男子32名、女子35名）、6年生72名（男子37名、女子35名）、学年不明2名の合計141名からの回答を得た。記入もれなど回答に不備があるものを除き、120名分を分析対象とした。うちわけは5年生57名（男子26名、女子31名、平均年齢10.9歳、SD=0.31）、6年生63名（男子31名、女子32名、平均年齢11.9歳、SD=0.30）であった。

2-2. 質問項目

仲間関係の位相 中島・関山（2016）の仲間関係位相尺度15項目を、一部文言を修正した上で使用した。親しい同性の友人との関係が以下の文章にどれくらいあてはまるかを答えて下さいと教示し、ピア傾向6項目（例：友だちとは、考え方の違いがあっても本当の気持ちを話すことができる、違う考えを持つ友だちとも知り合いたい）、チャム傾向6項目（例：友だちと意見や考え方が一緒だとほっとする、他の友だちと自分が仲良くなったら今の友だちに悪いと思う）、ギャング傾向3項目（例：一緒にいたずらをするのがおもしろい、追いかけたり、たたき合ったりして、ふざけあうのが楽しい）について、全くあてはまらない（1点）から非常によくあてはまる（5点）の5件法での回答を求めた。

心の居場所感（自由記述） 西中（2014）に従い、心の居場所を「たとえば、つらくなったとき、友だちとけんかをしたとき、悪口を言われたとき、悲しくなったときなどに、一番行きたくなる場」と説明し、そのような場を思い浮かべるよう教示した。またここでいう場とは、自分の部屋や教室などの具体的な場所でも、家族や友だちといった人やグループといっしょにいるところ（場面）でもかまわないとの説明を加えた。その上で、今思い浮かべた「心の居場所」とはどのような場か、自分の言葉で具体的に記述することを求めた。これは、次の心の居場所感を測定す

る尺度に回答する際に、思い浮かべた居場所についての回答を得ることと、実際にどのような場を居場所として思い浮かべるのかということについての資料を得るためであった。

心の居場所感 西中（2014）の作成した小学生の居場所感を測定する尺度（以下、居場所感尺度）を用い、西中の分析結果で示されている被受容感、充実感、自己存在感、安心感の4因子構造を採用した。ただし、安心感は結果で示されている3項目に、もともと想定されていた2項目を加えて5項目とし、計20項目を用いた。また軽微な文言や文字表記の変更を行うとともに、西中は4件法で回答を求めたのに対して、本研究では下に述べる5件法とした。先に自分が思い浮かべた「心の居場所」について以下の文章がどれくらいあてはまるかとの教示のもと、被受容感6項目（例：誰かがそばにいてくれる気がする、自分の話を聞いてもらえる）、充実感5項目（例：やる気いっぱいだ、生き生きしている感じがする）、自己存在感4項目（例：自分はかけがえない存在だ、自分には価値がある）、安心感5項目（例：おだやかな気持ちになる、ほっとする）について、全くあてはまらない（1点）から非常によくあてはまる（5点）の5件法での回答を求めた。

3. 結果

3-1. 尺度構成

仲間関係位相尺度 中島・関山（2016）に基づき、ギャング傾向、チャム傾向、ピア傾向それぞれに該当する項目の平均を用いて得点化した（1点～5点）。ギャング傾向については、「友だちとは悩みを語り合うより、わいわいさわぐことの方が多い」を削除した2項目とした方が信頼性が上昇したため、2項目の平均を採用した。 α 係数は、順に.718、.704、.635であった。全体に内的整合性は十分高いとは言えず、特にピア傾向の信頼性が低いが、今回はこのまま使用することとする。

居場所感尺度 西中（2014）に基づき、被受容感、充実感、自己存在感、安心感に該当する項目の平均を得点とした（1点～5点）。 α 係数は順に.903、.842、.855、.777であり、内的整合性は十分といえる。

心の居場所感（自由記述） 自由記述については、本稿では論議の対象とせず、カテゴリー化したうえで付録に例を記載する。

3-2. 学年による仲間関係の位相の変化

表1に、尺度得点の平均を学年・性ごとに示す。また表2には、各項目の平均値を示す。得点間の相関分析を行ったところ、ギャングとチャムの間のみ、弱い有意な相関がみられた（ $r=.24$, $p<.01$ ）。

表1 学年・性別 仲間関係の位相得点の平均

	5年		6年	
	男子	女子	男子	女子
ピア	3.31	3.50	3.40	3.78
チャム	2.72	3.01	2.88	3.57
ギャング	2.23	1.95	2.66	2.56

尺度得点について、位相別に学年×性の参加者間 2 要因分散分析を行ったところ、ピア傾向は、性の主効果が有意であり [$F(1,116) = 4.24, p < .05$]、男子より女子でその傾向が強いことが示された。チャム傾向は、学年の主効果、性の主効果ともに有意であった [順に $F(1,116) = 5.52, p < .05, F(1,116) = 9.92, p < .01$]。5 年生より 6 年生で、また男子より女子でチャム傾向が強いことが示された。ギャング傾向は学年の主効果が有意であり [$F(1,116) = 6.11, p < .05$]、5 年生よりも 6 年生のほうがその傾向が強い。いずれも交互作用は有意ではなかった。

また学年・性ごとに位相の得点を比較するために、参加者内一要因分散分析（ギャング／チャム／ピア）を行ったところ、いずれも主効果が有意であった[5 年男子 $F(2,50) = 11.85, p < .01$; 5 年女子 $F(2,60) = 27.16, p < .01$; 6 年男子 $F(2,60) = 6.06, p < .01$; 6 年女子 $F(2,62) = 15.92, p < .01$]。表 2 に示した平均値からは、全体として、ピア傾向、チャム傾向、ギャング傾向の順に強いことが見て取れる。多重比較（Bonferroni 法、5%水準）を行ったところ、男子は 5 年生、6 年生ともに、チャム・ギャング傾向が同程度で、これよりもピア傾向が高いことが示された。一方女子は 5 年生、6 年生ともに、ピア・チャム傾向が同程度で、ギャング傾向に比べて高いことが示された。

表 2 仲間関係位相尺度 項目ごとの平均

	5年		6年	
	男子	女子	男子	女子
ピア傾向				
友だちとは、考え方の違いがあっても本当の気持ちを話すことができる	3.54	3.74	3.74	4.03
友だちだからお互いの意見をきちんと言い合える	3.85	3.81	4.00	4.19
違う考えを持つ友だちとも知り合いたい	3.19	3.61	3.06	3.22
他のグループの人たちとも、自然につきあえる	3.58	3.61	3.55	4.13
これからのそれぞれの将来について話をするところがある	2.69	2.55	3.03	3.75
自分とは違う性格の友だちともつきあってみたい	3.04	3.65	3.00	3.34
チャム傾向				
友だちと意見や考え方が一緒だとほっとする	3.77	3.55	3.19	3.91
友だちのことを誰よりも知っていたい	2.92	3.06	3.23	3.63
仲のよい友だちと同じ持ち物を持っていたらうれしい	2.12	3.00	2.65	3.88
他の友だちと自分が仲良くなったら、今の友だちに悪いと思う	2.12	2.29	1.90	2.63
友だちとのメールやLINEなどのやりとりで、友だちの気持ちを知らいたい	1.81	2.45	2.61	3.38
仲のよい友だちといつも一緒にいることで安心する	3.58	3.68	3.71	4.00
ギャング傾向				
追いかけたり、たたき合ったりして、ふざけあうのが楽しい	2.31	2.13	2.74	2.50
いっしょにいたずらをするのがおもしろい	2.15	1.77	2.58	2.63

3-3. 居場所感尺度

表 3 に心の居場所感尺度の学年・性ごとの平均値を示す。また表 4 には各項目の平均値を示す。得点間の相関分析を行ったところ、すべての下位尺度間に中程度以上の正の相関がみられた ($r = .65 \sim .77$, すべて $p < .01$)。

下位尺度ごとに学年×性の参加者間 2 要因分散分析を行った。被受容感と安心感では性の主効果が有意であり [順に $F(1,116) = 7.43, p < .01$; $F(1,116) = 9.68, p < .01$]、女子が男子よりも被受容感と安心感を高く感じていた。充実感と自己存在感は学年の主効果が有意であり [順に F

(1,116) = 9.34, $p < .01$; $F(1,116) = 8.54$, $p < .01$]、6年生が5年生より充実感、自己存在感を高く感じていた。交互作用はいずれも有意ではなかった。

表3 居場所感尺度 学年・性別平均

	5年生		6年生	
	男子	女子	男子	女子
被受容感	2.81	3.27	3.03	3.70
充実感	2.80	2.88	3.28	3.55
自己存在感	2.60	2.74	2.98	3.48
安心感	3.38	3.71	3.44	4.15

表4 居場所感尺度 項目ごとの平均

	5年生		6年生	
	男子	女子	男子	女子
被受容感				
誰かがそばにいてくれる気がする	2.96	3.77	3.10	4.00
自分の話を聞いてもらえる	2.73	3.61	3.29	3.88
大切にされている気がする	2.65	3.06	2.90	3.50
受け入れられている気がする	2.96	3.16	3.03	3.75
必要とされている気がする	2.50	2.68	2.74	3.28
仲間と一緒にいるような気がする	3.04	3.32	3.13	3.78
充実感				
やる気いっぱい	2.77	2.61	3.13	3.38
生き生きしている感じがする	2.85	3.06	3.45	3.97
自分の力を発揮できる	2.73	2.94	3.35	3.63
自分に満足できる	2.85	2.58	3.16	3.47
自分に自信が持てる	2.81	3.23	3.32	3.31
自己存在感				
自分にはかけがえのない存在だと思う	2.31	2.55	2.77	3.41
自分には価値があると思う	2.54	2.55	2.74	3.06
自分が好きだと思える	2.38	2.65	2.81	3.25
自分の気持ちや考えは大切だ	3.15	3.23	3.61	4.22
安心感				
おだやかな気持ちになる	3.69	3.74	3.77	4.19
ほっとする	3.54	4.03	3.65	4.66
さわやかな気分になる	3.04	3.16	3.29	3.97
くつろいだ気持ちになる	3.69	3.84	3.39	3.94
ずっとそこにいたい気がする	3.62	3.94	3.48	4.53

3-4. 居場所感と仲間関係の位相の関連

仲間関係の位相と居場所感の関連を検討するために、相関分析を行った（表5）。全体として、あまり強い関連は見られていないが、明らかに居場所感と関連するのはピア傾向であり、ついでチャム傾向も一部弱い関連がみられることが明らかになった。

表5 仲間関係の位相と居場所感の相関係数

	被受容感	充実感	自己存在感	安心感
ギャング	0.10	0.08	0.12	0.02
チャム	0.18 *	0.16	0.14	0.19 *
ピア	0.29 **	0.23 *	0.27 **	0.22 **

*p<.05, **p<.01

4. 考察

本研究の目的は、小学校高学年児童の居場所を、「居場所がない」を感じたときにこそ意識される「心の居場所」と定義して、そこにいるときの感覚（居場所感）を測定すること、そして居場所感と仲間関係の位相との関連を検討することであった。

本研究では5年生と6年生という2学年のみが対象ではあるが、仲間関係の位相を発達の観点から検討すると、各学年とも、また男女ともに、ピア傾向>チャム傾向>ギャング傾向となっており、児童期に特徴的とされるギャング傾向よりも、青年期にみられるチャム傾向やピア傾向を持った仲間関係に移行しつつあることが推察され、思春期の入り口にある子ども達の仲間関係の発達の側面が示されている。また男子よりも女子でチャム傾向、ピア傾向が高く、男子はギャングとチャムが同程度であるのに対して、女子ではチャムとピアが同程度と、性差がみられる。一般にこの年頃では男子よりも女子のほうが早熟であることを考えると、仲間関係の発達においても女子の方がやや早くギャングからチャム・ピアへと移行しているのではないかと考えられる。チャム傾向を項目別に詳しく見ると、学年差が顕著な項目は「仲のよい友だちと同じ持ち物を持っていたらうれしい」「友だちとのメールやLINEなどのやりとりで、友だちの気持ちを知りたい」である。前者は、チャムグループに特有の「同じ趣味・関心の共有」を示す項目であり、チャムグループに典型的な志向と言えよう。後者は、中島・関山（2016）では「友だちとのメールや手紙などのやりとりで、友だちの気持ちを知りたい」とされていた項目の「手紙など」を「LINEなど」に変更した項目である。LINEを加えたことによって、5年生よりも6年生で高い傾向がみられた可能性は高い。今後、子どもたちの日常のコミュニケーション行動もあわせて検討したうえで、質問項目の文言を慎重に検討すべきと考える。

一方でギャング傾向は5年生よりも6年生で強いという結果が得られた。これについては、調査実施時期による影響も考慮すべきであろう。今回の調査は2月中旬に行われた。6年生にとっては卒業まで1か月を切った感慨と高揚感に満ちた時期であり、また一定数の生徒にとっては中学受験が終わり、解放感を感じていたであろう時期でもあった。このような時期であるから、「ふざけあうのが楽しい」や「いたずらをするのが面白い」と感じる傾向が強かった可能性も考えられ、結果の解釈は慎重に行うべきと考える。

居場所感については、被受容感と安心感で女子のほうが男子よりも高く、西中と同様の結果であった。学年差については、西中の結果では、安心感を除き4年生が5、6年生よりも高い居場所感を感じているという結果であった。これについて西中は、被受容感、充実感、自己存在感が他者からの評価によって左右されやすい感情であり、4年生が他者からの評価を気にしない段階にあるからではないかと考察している。本研究では、4年生は対象としていないために直接的な比較を行うことはできないが、充実感と自己存在感は5年生よりも6年生のほうが高く、自分の「居場所にいる」と感じるときに、やる気や自信を持ち、自分への満足感、自己価値が高まるなど、自己を肯定的に評価する傾向が強まることが示唆された。

では、このような居場所感の感じ方と仲間関係は関連するのだろうか。本研究では相関分析を行うにとどまったが、ピア傾向と居場所感には正の関連があることが示唆された。すなわち、友人との間に自立的で相互に承認しあう関係が築けることが、居場所感を持てることに結びつくのではないかと考えられる。もっとも居場所感とは友人関係に限定したものではなく、居場所として自分の部屋、家、学校があげられることが多い（杉本・庄司, 1992）。また居場所を人間に限定した場合でも、友人以外に、自分ひとり、母親が選択の上位にあげられる（豊田・岡村, 2001）。このように居場所感には様々な要因が関連するため、仲間関係の関連は、有意ではあるが弱いものにとどまったと考えられる。また本調査では、居場所として何を思い浮かべたかについては、自由記述のデータを収集したものの分析の対象とはしていない（付録に例示）。今後は、個人が認識する「居場所」が何であるのかということと仲間関係の位相の関連も検討する必要がある。また、本研究では居場所を『たとえば、つらくなったとき、友だちとけんかをしたとき、悪口を言われたとき、悲しくなったときなどに、一番行きたくなる場』と説明し、想起することを求めた。物理的場所にも人間関係だけでも限定せずに説明するために「場」という表現を使用したのが、説明としてふさわしい文言であったか、わかりやすかったかどうか、検討する必要がある。さらに本研究では、上記のような場にいるときにどのように感じるかという教示のもと、居場所感を測定した。このような定義に従った調査の場合、そもそもそのような場が「ない」と感じている子どもの姿をとらえられていないことは大きな課題であり、今後「居場所感」の測定を目的とした研究と、居場所がないと感じる子どもたちへの対応や実践をどのように結びつけていくのか検討していく必要があると考えられる。

謝辞

調査にご協力いただいた小学校の教職員、生徒のみなさんに感謝いたします。また分析を手伝ってくれた鈴木千晴さん、松井咲子さんに感謝します。

〔引用文献〕

- 保坂亨・岡村達也（1992）キャンパス・エンカウンター・グループの意義とその実施上の試案 千葉大学教育学部研究紀要 第1部, 40, 113-122.
- 中島浩子・関山徹（2016）中学生における仲間関係の発達と受容感およびネット利用との関連 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 25, 203-215.
- 西中華子（2014）心理学的観点および学校教育の観点から検討した小学生の居場所感：小学生の居場所感の構造と学年差および性差の検討 発達心理学研究, 25, 466-476.
- 岡村季光・豊田弘司（2015）「居場所」（安心できる人）を規定する要因—成人愛着スタイルによる検討— 人間教育学研究, 3, 175-180.
- 岡村季光・豊田弘司（2016）「居場所」（安心できる人）を規定する要因—ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討— 奈良教育大学紀要. 人文・社会科学, 65, 27-34.
- 杉本希映・庄司一子（2006）「居場所」の心理的機能の構造とその発達の変化 教育心理学研究, 54, 289-299.
- 豊田弘司・岡村季光（2001）大学生における『居場所』 奈良教育大学教育研究所紀要, 37, 37-42.

付 録

(教示)

「心の居場所」とは『たとえば、つらくなったとき、友だちとけんかをしたとき、悪口を言われたとき、悲しくなったときなどに、一番行きたくなる場』のことです。そのような場を思い浮かべて下さい。ここでいう場とは、自分の部屋や教室などの具体的な場所でも、家族や友だちといった人やグループといっしょにいるところ（場面）でもかまいません。

今思い浮かべた「心の居場所」はどのような場ですか？ 自分の言葉で具体的に書いてください。

記述をカテゴリー化したうえで例示する。複数の類似の記述については代表的なものを記載している（例えば、「自分の部屋」というような記述は非常に多くみられたが、ひとつにまとめている）。

場所		
特定の場所（他者と共有）	特定の場所 （プライベート性の高い）	特定の場所（場面性が強い）
家 自分の家 家のリビング テレビの前 学校 教室 音楽室 保健室 その他 動物がいる所 公園のブランコ	自分の部屋 寝室 家のふとん 毛布の中 ベッド トイレ 自分の席 一人の場所	他者という場所・場面 家族のいる家 ならいごとなど 友達と行った思い出の場所 一人の場面 自分の家のその時だれもいない部屋 誰にも話かけられない場所 静かなところ 暗い夜の静かな公園 遠い所の公園 その他 ストレスが発散できる場所 うつぶせになれる場所

人	その他
家族 家でお母さんに聞いてもらうとき 家で母にはなす 友だち 学校で友達という時 友だちという場面 仲良しな友達 友達と一緒にいたい 友だちとのグループ 友だちがたくさんいるところ 親友と一緒に話せる場 友達とのメール	どこにも行きたくない とにかくその場でだまって考える ストレスをためない そんなことくらいちっともかなしくない そのような状態におちいらない